

シンポジウム 「アクティブ・ラーナー育成のための戦略と方法－九州大学はどのようなアクティブ・ラーニングを展開しているのか－」 参加報告（2016.2.18）

中嶋康二（熊本大学大学院社会文化科学研究科教授システム学専攻 特任准教授）

2016年2月18日（木）、九州大学基幹教育院主催の表題のシンポジウム（於：九州大学西新プラザ大会議室）が開催され、九州大学において2014年度から2年間取り組まれてきた全学的なアクティブ・ラーニング（以下、AL）の諸実践の成果・進捗に係る講演とパネルディスカッションが行われた。講演冒頭では、公立はこだて未来大学の実践事例に関する基調講演があった。

本学教授システム学専攻で開発中の社会人教育専門家養成教材（以下、本教材）では、教材コンテンツのトピックのひとつにALを取り扱う。また、本教材受講者に対しても能動的学習を求める設計を行うことから、学外でのALの実践事例を収集することには、（大学院⇔学部、対面学習⇔オンライン学習という文脈の相違はあっても）大変意義がある。

はこだて未来大学では、国内で「AL」というキーワードが頻出されるようになるかなり前（2000年の開学当初）から、学生を主体的・能動的に学習に関わらせるために、学生のみならず教職員等も含めた垣根を取り払って共同で学ぶ学習環境とカリキュラムを設計し、その中でプロジェクト学習を実践している。一方、九州大学では、「アクティブ・ラーナー（以下、ALer）育成」（注1）を幹とした基幹教育カリキュラムの設計を行い、2014年度から運用している。基幹教育セミナーや課題協学科目においてグループワークやPBLを取り入れ、入学当初から一貫したALer育成環境で学んだのち、研究室配属へとつなげることを想定している。（注1）九州大学における「アクティブ・ラーナー」の定義：学び続けることを幹に持つ、未知な問題や状況にも果敢に挑戦するスピリットと行動力を備えた人（当日配付資料より）

パネルディスカッションでは、そもそも全国各大学のAL実践の主旨はどこにあるのか、また、初中等教育におけるALの実情を見据えた取組みになっているか、といったクリティカルな投げかけがあり、単なる一大学の事例紹介に留まらない示唆に富む対話が聴けた。

社会的要請として、生涯継続的に能動的学修を実践していける人材を育成することは、まさしく「社会人学び直し」に直結しており、大学教員が学習文脈に合ったALの手法を適切に設計でき、学習指導できるようになることが肝要であることから、本教材の意義が確認できた。また、そこで（大学教員に）有効な学習機会を提供するために、引き続き広く実践事例の情報を収集し、教材設計の改善をしていく所存である。